
俺のオナニー物語火魅子伝編～

えぞくろてん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺のオナニー 物語火魅子伝編

【NZコード】

N7043Z

【作者名】

えぞくろてん

【あらすじ】

九嶺君ありの火魅子伝に万能な主人公をつっこんで好き勝手にします。兎華乃さんぺろぺろ

ネタバレ下ネタ処女作妄想最強自分勝手などが含まれております
いやな予感がしたらお引き取りください危険です。

読んでいて気分が悪くなつても感想に書かないでね！><

読むときは自己責任でお願いします 運営に消されたらごめんなさい

神様まじ神様（前書き）

いろいろどうりめんなさい

実際にオナニーするってことじゃなくて好き勝手するってことです
すみません

あと火魅子伝にいくまでに多少時間がかかります。

兎華乃さんをぺろぺろするまでにはもつと時間がかかります

読んでいて気分が悪くなつても感想に辛辣なことを書かないでね！

神様まじ神様

「ん・・・?」「は?」

朝起きたら夜だった。これって黒魔術?

「こんにちは」

「ー! こんにちは。・・・私の名前は齋藤夏樹といいます。失礼ですがあなたは?」

気づいたら後ろに美形がいた。

「私に名前はありません。素性を聞いているなら神や悪魔といったようなものです。」

神様と呼んでくれていいですよ?」

「神様! ? そうだったのですか」

「ちなみにあなたをここに呼んだのは私です」

「? 神様が?」

「はい、あなたに取引を持ちかけようと思いまして」

「取引ですか?」

「はい、取引内容はこうです。あなたには異世界にいっていただきます。異世界にいくにあたってあなたの望みをひとつ叶えて差し上

げます。そこで魔王と呼ばれる存在を倒すことができたらあなたの勝ちです。もうひとつ望みを叶えましょう。ただし死んだらそこであなたの人生は終わりです。何かご質問は?」

「はあ、能力はどのよほななものでもかまわないのでしょうか?」

「はい、基本どんなものでもかまいません」

「魔王を倒したら現実世界に戻されるのでしょうか?」

「そこは魔王を倒した時点でその世界にとどまるか元の世界に帰るか選んでいただきます」

「魔王とはどういった存在ですか?」

「魔王とは魔物を引きつけ生き物を殺しつぶす存在です。生き物と手を取り合つことはありません」

「私はどのタイミングでその世界にいくことになるのでしょうか?」

「魔王が力をつけ始め、魔物が生き物を襲い始めるちょっと前になります」

「異世界はいつた瞬間死ぬような環境や場所じゃないですよね?」

「はい、基本的な環境は地球と変わりません。異世界にいつてから一円は基本死なないようなところに送らせていただきます」

「言葉や文字はどうなっていますか?」

「基本的に日本語になつています。ただし古代文字などほかにも種類があります。」

「時間制限などはありますか?」

「ありません。強いて言つならあなたが死ぬまでが期限です。別に死ぬまで魔王を倒さなくても結構です」

「魔王倒さなくともいいんですか・・・」

「はい、まあその場合世界が滅びるかもしませんが・・・」

「選択できない選択肢を出されても・・・もしいくなら家族に手紙を書かせてもらつてもいいですか?」

「はい、ただし私や異世界人々の話はふせてくださいね?」

「はい、・・・あの、神様、もしよければ私が死んだら家族に保険金みたいなものをサービスしてくださいませんでしようか?」

「、まあ少しくらいこでしたらいいでしょ?」

「神様ありがとうございます」

「さて、そろそろ答えを聞かせていただけますか?」

「ちなみに拒否権はありますか?」

「ありますよ」

「あるんですか」

「あくまで」これは取引ですからね」

「、それではこの取引受けをせいでいただきまます」

「そうですか、私としてはうれしい限りです。承諾を決める決め手は何でした?」

「そうですね、神様が対等に接してくださったこと、丁寧に対応してくださったこと、アフターサービスを充実させてくださったこと、そして何より、」

「なにより?」

「拒否権があつたことです。強制される」とは苦痛ですかね」

「なるほど・・・それで能力のほうはどうしますか?」

「そうですね、植物を生み出したり成長させたりできる能力をいただけますか?」

「植物をですか」

「はい、苗を出せたり木を出せたりりん」などの果実だけを出せたり、またその果実にしても大きいの小さいの、甘いの酸っぱいのなどの特徴を決めて出せるようにお願いします」

「ふむ、ではあなたが名前を知っている植物自在にを生み出せ、また自らの周りにある植物を成長させることができる能力でよろしく

ですか？」

「はい、それでお願いします」

「わい、わいわい送りせていただきますが心残りはありますか？」

「こりこりとありますが神様つて男ですか？」

「男でもあります女でもありますね。姿を変える」とも言わせます

「じゃあ美幼女になつたりもできますか？」

「できあがよ」パアアアア「これでいいですか？」

「生まれる前からお慕い申しておつました———」ガバッ

「フフフシ「おやおや、それはありがとわいわいます」

「くわ、神様の心伝わるぞ・・・」じゅあ宗教が流行るわけだ・・・

「それではもうひしこですか？」

「はい、こりこりとありますがとわいわいました。これからは毎日祈りさせていただきます」

「「「」」」「ありがとうございます、それと私もあなたの」とが好きですよ~」

「ままままじつですか！」

「はい、礼儀正しくて（？）私のことを慕ってくれていて取引にもちゃんと考えてから承諾してくださいましたしね。できれば魔王を倒してからもう一度会いたいものです」

「絶対また会いに来ます！そのときはおっぱいもさせてください…」

「フフフフシ」「かまいませんよ。またあえることを楽しみにしています」

「まじ神様神様すぎる・・・それではまた魔王を倒したら」

「はい、また魔王を倒したら」

「つして私は能力をつけさせていただき神様のおっぱいをもみこ、もとい魔王を倒しにいくのだった

神様まじ神様（後書き）

更新停止した「[じ](#)」みんなで
読んでくださいありがとうございました

キングクリムゾンと最強化（前書き）

ねむねしへだれこ

あと序章なんでも短いです

キングクリムゾンと最強化

「ヒーローが異世界か・・・無事に着いたようだよかつた」

あの後私は神様により異世界に送られた。送られた場所は草原で遠くに町と森があるのが見えた

「まずは能力の確認をしなくてはいけないな。」キヨロキヨロ「周りに誰もいないことを確認して・・・と」

一応しゃがんで発動するとひみを隠しながらやつてみた

「つんぐーー」ズボン

「えつなにこの卑猥な生成音・・・」

「うやです。本当はアドバコッとかいって出ないかなあと神様が大好きです」

「音まで設定できるとか神様凝りすぎ・・・でもそんな神様が大好きです」

「とりあえず祈つておいつ

「ひとつあえずつんぐーー」食べてみるか「カブツ シヤリシヤリシヤリ

「こと美味しい」

とつあえず能力は無事に発動することができた

「じゃあここからが本番だな・・・」

私がこの能力を選んだのには訳があった。しかし、それがうまいくかどうかは賭けだつた

フウー「神様お願いします・・・いでよ！力の種！」

パアツ

「で、出た・・・やつた！これで！」

神様のおっぱいがもめる！

（1カ月後）

「ふう・・・もうこっちに来てから一月か・・・」

私がこっちに来てからはや一月がたつていた。その間私は森で能力を使いまくり種や実などを食べまくる生活をしていた。
力がない状態だといぐら能力を持つていっても無事に過ごせるかわからぬからだ。

いや、むしろ能力に目をつけられて何が起こるかわかつたものじゃない。なので草原で第一次種大食い大会を開催してから森でベジタリアン生活を送っていた

「んじゃあそろそろいきますか」

神様の保障つきの一ヶ月が過ぎたしもう野生生活は勘弁してほしかつたのでそろそろ町に行くなり魔王退治に行くなりすることにした。

齋藤夏樹（2-1）

男

レベル232（天使の種（レベル3上昇）77個完食）

H P 999（レベル上昇、命の木の実99個完食）

M P 666（レベル上昇、ふしぎな木の実99個完食）

体力 999（レベル上昇、ちからの種99個完食）

すばやさ 999（レベル上昇、まもりの種99個完食）

きょうさ 1008（レベル上昇、すばやさの種108個完食）

かじこさ 999（レベル上昇、きょうさの種99個完食）

運のよさ 666（レベル上昇、かじこさの種99個完食）

かっこよさ 777（レベル上昇、ラックの種255個完食）

かっこよさ 2800（レベル上昇、うつくし草2728本完食）

その他いろいろ

今の状態

身長130cm

28kg

魔法使い予備軍 紳士

巨乳

黒髪長髪

どこかのサイズ 通常値 5cm 最大値20cm ピンク色

うつくし草の食べすぎで理想（神様）に近づいた結果このよつた姿
に。

本人はかなり幸せな様子

キングクリムゾンと最強化（後書き）

お読み下さいが、これは必ず

キングクリムゾンと再会（前書き）

これで導入部は終わりです。
次から火魅子ります

キングクリムゾンと再会

3年後)

「これでようやく終わりか・・・」

3年かけてついに私は魔王を倒すことができた。最初はディスガイア的な世界でこのステータスでもぼこられたらどうしようなどとびくびくしていた。

うつくし草を食べてみたら理想の姿（ロリ神様）になつていったので戦力そつちのけでたべまくつていたのだがそれが原因で死んでしまつたら末代までの恥だ

「まあ、私が末代だからいいんだけどね」

感傷にひたつてついどうでもいいことを口走つてしまつた。実際は町でのんびりしながらナンパしてくるやつらを洗脳、改宗させて教徒をふやしながらもずっと一人で旅を続けていた。魅力を上げすぎたせいで厄介ごとも多かつたが全てを圧倒的なステータスで乗り切つてきた。

王族まじうざす。権力者は厄介ごとの種なのでできるだけかかわらないようにしてきた。

あとはてきとうに楽しみながら魔物を狩つていつた。

正直一月で終わらせられる気がする旅だつたが楽しみたかったので3年もかかつてしまつた。

黄金桃（寿命50ヶ月延長）、世界樹の葉、復活の草を持っている私に魔王がかなうはずもなく戦い自体は3分もからなかつた。最後には人口の4割を改宗させることに成功した私は満足して神様

を待つ
ていた

「お久しぶりです、魔王討伐おめでとうございます」

「少しあは変わったようですが中身は変わっていませんね」

「あいかわらずなんとこり心の広せ・・・田舎にがしり山おつぱいをもみしだいても文句のひとつもいわないなんて・・・」

面白いものを見せてくださったお礼ですよ」

「ん？ 面白いもの

「はい、あなたの旅は全て見させていただきました。私のために信者を増やしてくださいってありがとうございます」

「どういたしまして………」とは私のオナニー生活も?」

「口ッ『3年間ずっと私でしてくだれりてあつがヒツジヤルコモア。こんなに思われて私は幸せですよ?』」

「フフフフ、『そのときは責任をとつてお世話を差し上げます』

「へ、お世話わねてや・・・、こや、せひ逆お世話してやる・覚悟してくださこよー。一生貯くつりやこまくからねー。」

「はー、そのときはお願こしますね?」

「神様が神様過ぎてほんと何もこえない・・・」

「それどうしますか?」の世界に住みますか?それとも元の世界に戻りますか?」

「ん~~,元の世界に帰りたいです

「はー、わかりました。もひ行きますか?」

「はー、やつたこひとせ全部やつたんで」

「ハッ「それでは帰りましょうか」

「あ~~,久しづりのシャバの空氣はたまらんですたい・・・」

「魔王を倒した願い事は何にしますか?」

「あ~~,この能力を持つたままいろいろな世界をまわってみたいで

いです

「なるほど、いこですよ

「ありがとうございます。あとたまに神様に会って行つてもいいですか?」

「ここですよ」 二三三「こつでもどりわ

「かみわまー—————大好きですー」 ガバッ

ナテナテ「あなたは甘えん坊ですね」 二三三

「神様は全世界一の甘えさせ上手やでえ・・・」 スリスリスリ

「それでは早速行きますか?」

「ん〜〜、しばりくまつてもうつていいですか?すこいわがまま
やつりやつたんで戻つてこれたぶん家族に孝行したいんです・・・」

二三三「はい、わかりました。行くのはこつでもいいですよ?」

二三三「あつがどうぞります、神様」

キングクリムゾンと専念（後書き）

お読みいただきありがとうございます

火魅子伝突入（前書き）

これからも「ピペファンタジー俺のオナニー物語をよろしく！」

「もうそろそろこいつかな？」

しばらく実家で家族孝行したので私はそろそろ出発することにした。最初別物になつていた私に驚いていた家族だが説明したら受け入れてくれた。

「ほんまワイス幸せモンやでえ」

こんな優しい家族のために私は3ヶ月ほどなくしまくつた。世界中の果物や野菜、さらには異世界の食べ物さえも出して奉仕した。みんなよろこんでくれた。やりたいこともやつたので、家族に再会を近い神様に会いに行つた

「ではどこの世界にいきますか？」

「火魅子伝の世界、それも九嶺君が呼び出されたところでお願いします」

「わかりました、それではいってらっしゃい」二コラ

「はい！いってきます神様！」二コラ

その日九峪と日魅子は日魅子の遺跡の発掘をしている養父の姫島教授の下へ、週末の連休を利用して遊びに来ていた。

発掘の手伝いは楽しく、また親しいものと来ているとあって九峪は楽しい休日を過ごしていた。

しかし、遺跡で未知の銅鏡が発見されてから状況は変わった。発掘メンバーの全員が銅鏡の発見に喜び、興奮したのまではよかつたのだが、

そこから日魅子の様子がおかしくなった。話しかけても空返事でどうにも心ここにあらずといった感じなのだ。

そして夜になると日魅子は一人ふらふらと外に出て行つた。それをおかしく思った九峪は日魅子の後をつけていった。

「日魅子…」

「あつ、九峪？」

「どうしたんだよ、わざから何か変だぞ？」

「呼んでるんだ…」

「呼んでる？呼んでる？何が…あつおい！」

日魅子は九峪の問いかけに答えず、発掘物を置いてあるプレハブに入つていった

「おい、いくら発掘の手伝いをしているからって勝手に入つたりし

たら怒られるぞ！」

「邪魔しないで！」

「な、何なんだいったい？？？」

日魅子は九峪の忠告を聞かず、そのまま昼に見つけた銅鏡を持った日魅子が銅鏡をもつた瞬間、銅鏡が光を放ち、どこからともなく声が聞こえてきた

ようやくあえたね　　まあ　いつ　きみがいるべきせかいへ

そして光が最高潮になつたとき

「日魅子…………！」ガツ

九峪雅比古は直感的に日魅子に体当たりしていた。体当たりされた日魅子は銅鏡を落とし、プレハブの壁へと飛ばされた

「だ、大丈夫か日魅子！」

そういう九峪は日魅子の元へ駆け寄ろうとしたが体が動かなかつた

「い、これは…………？」

下を見ると銅鏡からあふれ出た光が自分の周りにまとわりついていた

「日、日魅子…………」

そして九峪の意識は薄れていき　九峪はこの世界から消えた

火魅子伝突入（後書き）

実際にコピペしてるわけじゃないんですけど
単行本片手に書いてるんでおなじことですよね

めぐらべ山流（前書き）

作るの難しそう…・説明余地せどんじ丸写しにしてしまった…
漢字変換が大変なものは専用字でいかせていただきます
いろいろひじいですけど、ご容赦ください。
少しづつよくしてこけるようにがんばります

九嶺は気がつくと、鬱蒼とした森の中にいた

「どうだ、こじは？」

九嶺はまだ上手くまわっていない頭を動かせながら周囲を見回す。

「どうこじは？ どうだ？ こじは？」 いつたい何が起こったんだ・・・？」

九嶺が混乱していると不意におかしな声が聞こえた

「あれえ？ 何で君が？」

あわててもう一度あたりを見回すと、自分の23歳くらい前におかしなものが浮いているのに気づいた。

夢を見ているのだろうか？ 夢にしてはやけにリアルな夢だ。まあ、夢なら夢でかまわないから訊くだけ訊いてみるか

「なんだ、おめえは？」

「やあ！ 僕は天魔鏡の精さ。やつだな、ま、キヨウちゃんなどでも呼んでおくれよ！」

約50cmほどのそれは片手を挙げて九嶺に挨拶してきた

「そして私は地獄からの使者、スパイダーマッ！」

いつのまにかキョウの横にいた女の子（？）がポーズを決めながら
そのまま宣言した

「おわっ！？ どうからでてきた！？」

「えっ！？ 君は誰だい？」

「ん、九峪君のストーカーさ、九峪君が世界を超える気配がしたから
追つってきたんだ」

「俺のストーカー！？」

「！？ へえ、世界を超えて追つかけてきたのか。最近のストーカー
はやるなあ

「まあ嘘なんだけどね」

ガクツ「嘘なのかよ、変なやつだな。そういうやそつちにいる天魔鏡
の精つてのはいったいなんだ？」

「君も見ただろ？ 人に遺跡で発掘された銅鏡を。あれが天魔鏡な
のさ」

「あの銅鏡！？ じゃあお前はあれに宿つてている精霊みたいなもんだ
つていうのか！」

「そうそう、それだよ。それ

「こんなちんちくづんが・・・にわかには信じられないな」

「信じられないっていつも、現にこうしているじゃないか」

「じゃあその天魔鏡の精様に訊きたいんだがよ、いつたい何が起つたんだ！？」**ここはどこだ？**「どうして俺はこんなところにいる！？」

「え、えーと……」

「えーとじゃねえ！これはおめえの仕業なんだろ！？」**あいつらと説明しろ！**」

「いや、あのね？つまり……」**これは間違いで、その、予定とは違つて……君があんなことをするから、ああ僕はこれからどうすれば……**」

「おー！ぶつぶつ言つてねえでちやんと説明しろ！」ガクガクガク

「わ、わかったから手を離して！」パツ「乱暴なんだから、もう」

スツ「早く説明しろ」

ビクッ「わ、わかったよ。そうだな、ここは古代の九州。そうだな、君たちの歴史で言つながら三世紀いろいろかな」

「三世紀の九州だあ！？」

「うーん、ちょっと違う。九州じやなくて九州。ここは君たちの世界につながつている世界じゃないんだよ。

パラレルワールドとでもいえばいいのかな」

「パラレルワールドだって？はあ……常識じや考えられない事態

になつてこることだけは確かみたいだな・・・
まあいいか。それより、はやく返せよ
「みせよ

「えつー・?」

「えつじやなくして、お前が間違つて連れてきたんだろー・間違つてた
んなりやつわと屬は

「無理だよ

「なにいー!?

「僕、時をさかのぼることはできても、もう一廻りのことができな
いんだ」H>ン

ブチブチブチッ 「どうこうことだてめえー・そんな無責任なことが許
されると思つてんのかこりあー・」ガシッ

「ひーいーーー! わ、わかつたから手を離してえええー!」

「本当は戻れるんだるー!」

「いや、その・・・

「還れないってのかー!?

「か、戻れる、戻れる、もうひとつ

「どうひまつて?」

「え？ いや、その・・・」

「てめえー、口からでまかせ言つてんじゃねえだろ？ なあー。」

「ち、ちがうよつ、だから、その・・・。 そう火魅子、火魅子さ。 邪馬台国を復興させて火魅子を立てれば、君は元いた時代に還れるよ」

「田魅子だと？」

「セウジヤなくて火魅子。 邪馬台国の中王、火魅子だよ」

「どうこいつ」とだ？

「火魅子だけが動かせる時の御柱つてのがあって、それがあれば君を元の時代に還すことができるんだ」

「時の御柱つてなんだ？」

「時を移動するための仕掛けみたいなものだよ」

「ふうん、タイムマシンみたいなもんか、じゃあ、それがあれば俺は戻れるんだな」

「で、その火魅子つてのはどこにいるんだ？」

「いないよ」

「どうこいつ」とだてめえーーーーー？」 ガクガクガクガク

「ぐわあああーーーーー？ や、やめてええーーーーーちゃんと方法は

あるからー。」

「思つたより長いからそろそろ私も説明しちゃおうかな」

「おわつそりいえばお前もいたのか」

九峪達は熱くなつてすっかり忘れていたが夏樹はスパイダーマンひつこに満足して今まで傍観していたのだった

この世界は天界、仙界、人間界、魔獸界、魔界があり邪馬台国王族は天界人の血を引いていてたまに強力な力を持つた女性が生まれる。その女性を火魅子として国を運営していつたのだが血が薄れていくにしたがつて長い間火魅子が生まれないときができた。

その隙に魔獸界や魔界から魔人などを召喚した狗根国に滅ぼされてしまつた。滅ぼされてから十数年たち、各地に散つていた火魅子候補が育つてきたので邪馬台国を復活させましよう。そしたらついでに九峪君もおうすに還れるよ 今ここ

「それでなんで俺が呼ばれんだよー！」

「実は君のガールフレンドの日魅子ちゃんは邪馬台国王族の人でね。しかもかなり強力な力を持つた。狗根国に滅ぼされたとき九峪君の世界に自力で逃げ込んだんだ。まあ幼かつたから覚えてないようだけど。それでキヨウさんは日魅子ちゃんを呼び出そうとしたんだけど九峪君のスペシャルプレーでこうなつたわけだね」

「まじかよ・・・」

「あと九峪君が還りたいなら還してあげるよ

「…。遺せるのか…。」

「うん、まあその場合田魅子ちゃんがここに来てもいいことになるナビ」

「できるの…。」

「じゃ」とだ

「田魅子ちゃんは邪馬台国の王族だしな。元からキヨウセイは田魅子ちゃんの方を呼び出すつもりだったし。

九嵐君を還すならば本来の思惑通りに田魅子ちゃんの方を呼ばないと。ちなみに邪馬台国は復興を手伝つと少なくない確立で死にます。どうする九嵐君、

君が田魅子ちゃんの代わりに邪馬台国を復興を手伝つなら田魅子ちゃんを「ひよこ」とよばなくてもいいしつこでに私も手伝つよ。でも還りたいなら私が元の時代まで送つたげよう。代わりに田魅子ちゃんを連れてくることになるけど

「…。田魅子をこんなところに連れてくるわけにはいかねえ

「じゃあ?」

「俺が邪馬台国を復活させてやるひよこねえか!」

「かつこいなあ九嵐君は」一ノ瀬「やんじやまあ邪馬台国を復興田指してがんばってこきますか!」

「おう!でも復興つて言つたって俺は何をすればいいんだ?」

「それは僕にまかせてよー今まで邪馬台国の復興が成せなかつたのは邪馬台国の旗印となる存在がいなくて求心力がたりなかつたからなんだ。

でも今は火魅子候補に邪馬台国の神器たるこの僕、それに神の使いの三點セットが存在してゐからまずはその三點セットを集めようー」

「お前つて神器だつたのか・・・まあそれはいいとして神の使いつてのはいつたいなんだ?」

「やだなあ、君の事に決まつてるじゃないか

「なんだとおー!」

「いや、だつて考へても『』らんよ。君が素直に僕はここによく似た未来の別世界から來た高校生ですつていつても誰か信じてくれると思つ?」

「ぐつ

「だからね、神の使いを名乗るの

「いいのかよ神器がつかつて

「いいのいいの、言ひしるひとまうせだばどやるひとはかわらないんだから」

「そんなもんか・・・」フウツ「わかつた、還るためなら神の使いとやうになつてやうひづじやねえか

「やつやつ、悩んでたつてしかたないんだから前に向いて歩いりつよ。
それじゃあまずは伊雅を探そう」

「伊雅？」

「かつての邪馬台国国王の弟で、まずは彼を見つけて寝食を保障してもらおう。伊雅は邪馬台国の残党勢力とも連絡を取り合っているはずだし、火魅子候補の居場所がわかるかもしれない。
それに伊雅は神器を持っているから同じ神器の僕は大体の居場所がわかるのさ」

「それじゃ、まあいいでぐだぐだしてもじょりがないしな。まずはその伊雅つてやつのとこに行くか」

「やつやつ、まずは行動だよ」

「それじゃあ話もまとまとつたよつですしありますか」

「ちよつと待て、そういうえばお前はいつたい何者なんだよ」

「やつやつ、九峪は僕が田魅子を呼ぼうとして間違つて呼んじゃつたけど君にいたつては呼んですらいないじゃないか」

「ん、ああああ、私も昔異世界に飛ばされたことがあつてね、それで同じよつに異世界に飛ばされてしまった九峪君のことが気になつてついつステーキングしてしまつたんだ」

「お前も異世界にー?」

「うん、私の場合はファンタジー世界に魔王を倒しに行つたんだけ

どね。そのときにつけてもらつた能力で「ひしてストーキングしたりしてゐわけだよ」

「魔王か。俺もそつちの世界がよかつたな。何かゲームみたいで。それで能力つてのは？」

「能力は植物を生み出したり成長させたりする能力と世界間を移動する能力だね。こんな風に」 ドピュッ

「食べるかい？」

「りんご」自体は美味そつだがなんだよその出すときの音は・・・

「「」ねんだ」ねんねざとじだよ」

「ねざとかよー。」

「パツ「これでいいかい？」

「あ、ああ・・・」ガブツシャリシャリシャリ

「つまつ、なんだよこれめっちゃ美味いじゃねえかー。」

「ふふふ、そつだらり「ねつだらり」私がおなかをいためて生み出したりんご」はおいしいだらり」

「なんだか急に美味くなくなつた」

「冗談だから気にせず食べててくれ。りんごに罪はないからな」

「ああ・・・」シャリシャリシャリ

「まあ私がいるから道中の食料は心配しなくてもいいよ。力も魔王を倒すくらいあるし、熊が出ても夕食行きだよ」

「なんだよ、思ったよりも簡単に復興できるんじゃないか?」シャリシャリシャリ

「ところがそういうのじゃないんだな。私はあくまでも九嵐君のつきをいだからね、サポートくらいしかしないよ」

「なんでだよ!」

「正直私は邪馬台国に関係ないからね。日魅子ちゃんは王族だから、九嵐君は日魅子ちゃんを危険な目にあわせないため。だけど私は九嵐君のその心意気にはれたってくらいしか理由がないのさ。だから手伝ってはするけど全てにおいて頼られても困るな」

「やつらか・・・まあ手伝つてもらえるだけいいと想つつか」

「やつらが前回きにこいつぜ九嵐君。私の名前は齋藤夏樹さ。気軽になつちやんでも齋藤さんでも好きに呼んでくれ」

「ああ、これからよむこへな。しかし自分でさん付けするが普通・・・」

「まあ私は九嵐君よりもだいぶ年上だからね。さん付けしても罰はあたらないよ」

「年上!・?そのなりでか!・?」

先ほどから夏樹がちよちよと走られられたのはちつちつと見て視界に入つていないとこつともあつてだつた

「今年で24になりました。ああどんどん魔法使いに近づいていく。
・・」

「24-?」

「異世界に行つたときにこうありますね。こんな素敵バディーになつてしまつたのさ」モモモモモモモモ

「自分の胸をもむな-」

「なんだい九嶺君、私のおっぱいをもみたいのかい？」

「うへ、こ、いや、誰がそんなもんもむか！」

「おっぱいをそんなもん扱いするなんてこの世界に嫉妬団がいたら誅殺されているよ・・・まあいい、もみたくなつたらいつでも言っておくれ」

「そんな機会はないと思つがな」

「やめろ-」

「だが断る」

アーティスト流（後書き）

つらじめでじゅうこころあると思こまですが考えるな感じの精神
で氣にしない方向でお願いいたします。

移動中（前書き）

短いし話が進んでないしものすごくオナッてます。

閲覧注意

「あらすじ」

邪馬台国は九州にあつた邪馬台国は本州にある狗根国に滅ぼされる。狗根国の戦力は魔人や魔獸を召喚してさらに魔界の黒き泉に入り超常的な能力を得た幹部など。

邪馬台国はヒミコオンリー。ヒミコは王家の超常的な力が強いものとなる。

けど今はいない。

この世界では法術という魔法のようなものがある。

狗根国は邪馬台国に伝わる（？）天界の扉といつものを探している。ヒミコ候補が育つたので反撃しようとする。

邪馬台国の神器が現代からヒミコと間違つて一般人九峪君を召喚。勝手に主人公がついてくる。

しかたないから九峪君を神の使いつてことにして邪馬台国復興を目指す。

とりあえず元王弟伊雅を探す

以上

「はあ・はあ・はあ・んつ、九峪君！出るよー！」ビュ

クンビュクン

「・・・、齋藤さん、変な音出しながら食べ物出すのやめてくれよ・」

・」

「ちえー、九峪君はヒモのくせに厳しいなあ」

「ヒモつて・・・」

「ふつふつふ、実際に今の九嵐君は私のヒモにすぎないのだよ。一
人だと食べ物も満足に入手できない、寝床も確保できない
、野犬一匹相手に致命傷、お風呂も沸かせない、トイレでお尻を拭
くことすら（紙がないため）できない。
童貞。どうだね九嵐君、動かないで食べる」飯はおいしいかい？」

「確かにそのとおりだけどもっと他の言い方はないのかよー」

「ほほおーん？そんなこと言つたやうのかい？それなら私にも考え
があるつてもんだよ」

「な、なんだよ・・・」

「はじめてあつたときから九嵐君は襲い甲斐がありそつだなつて思
つてたんだ」

「　　おい、冗談だろ？」

「ひやつはーあ」ガバッ

「うわつー」ドサッ

「ぐへへへへ、たつぱりかわいがつてあげよつじやまいか」一マア…

「おい馬鹿ーやめろ！」バッ

パシッ「おつと、無駄な努力だよ九嵐君。むしろ興奮するね」ハア

ハアハア「どうだい九嶺君、この世の中は力がないと何もできなくて、そして君は「こんなに無力なんだよ。」クリクリクリ

「乳首をいじるなー。」

「いやじゃ

「いやじゃ

「くつ、確かに無力かもしれないけどな、俺はあきらめねえぞ！力がなくたって何か方法はあるはずだ！俺はなんとしてでも邪馬台国を復興させて元の時代に戻るんだ！」

「やつぱりかっこいいなあ九嶺君は。」ヒョイツ

「え？」

「ん、なんだい九嶺君、そのまま童貞をいただいて欲しかったのかい？」

「んなわけあるかー！」

「むしろ私の童貞をもらってくれ」

「断る！　　え？齋藤さんってもしかして男なのか？」

「そうだよ。魔法使い街道一直線だよ。ちくしょう、もう九嶺君で童貞すてちやおうかな」

「頼むからやめてくれー。」

「しかし処女でもある」

「どうせなんだよ」

「男だよ。男でもお尻が未使用の場合処女を名乗つてもいいのさ」

「全国の女人に殴られるぞ」

「でも九嶺君になら処女あげてもいいよ／／／」

「...アガハリ」

「……後で姫女尊にてせん」

卷之二

「人ともそぞそぞ休憩終わりにするよ」

テクテクテク 「結局さつきのはなんだつたんだよ・・・」

「この世界の怖さをちょっと体に教えてだけさ」

「もつとやり方つてもんがあるだろうが」

「セイは私の趣味だね」

「趣味だな」

「照れりんぐ」

「ビニに照れる要素があつたんだよ・・・」

「九嶺君の発言全てが照れ要素だ。んつ？伊雅さん達がこっちに気づいたようだね。こっちにむかってきてるよ」

「おつ本当か！助かった、もう結構疲れてたんだよな。それで伊雅さんとやら今ビニへんにこるんだ？」

「向いの方角にあと田キロひとつだね」

「冗談だろ？」こじが東京だつたら熱海までつこつけだぞ！」

「ほんとだよ、歩けないなら私がおぶつていこつか？・ただちょっと背負つてる途中お尻を開発してしまうかもしれないけど・・・」

「誰が乗るかーもつとましな方法はないのか？」

「まあ向いから向かつてきてるから黙つても合流はできるんだけど・・・、そんな甘えてると興奮した私に襲われるかもしれないよ」

「仕方ない、もつかよつと歩くか」

「倒れるまで歩いたりひょんとお世話をねから大丈夫だよ」

「何かあんま安心できなこなあ」

「心外だなあ。身の危険を感じるけど被害はなにって評判なの?」

「俺その人たちと友達になりたいな」

「元の時代に戻つたら紹介してあげるよ。齋藤被害者の命と」

「おまえ元の時代で何やつたんだよー。」

「今と変わらないよ」

「なんてこいつか齋藤をひんてぶれないなあ」

「ありがと。九峪君は初異世界で疲れてるだろひんじ近くにある今は
奉られてない神社について伊雅さんを待とうか」

「そんなどいろがあるのか、よし、早速行こう」

「もひ、九峪は調子がいいんだから」

移動中（後書き）

次話は三日以内に投稿したいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7043z/>

俺のオナニー物語火魅子伝編～

2011年12月27日22時49分発行